

母親の教育志向における地域性とネットワークの影響

小西 凌（三重大学大学院）

I. 研究背景と問題意識

母親の教育志向、特に「より良い大学進学」への期待は、長らく学歴や所得といった階層属性によって説明されてきた。しかし近年では、友人・ママ友などのネットワークや、地域の教育文化や制度的文脈が影響することが指摘されている。たとえば、荒牧（2018）は、母親の高学歴志向が、家族内外のネットワークにおける会話や参照行動を通じて形成されることを示している。特に、母親自身が選んだ友人・知人との間で教育情報がやりとりされ、学歴の高い人物が参照されやすいという傾向がみられる。このことは、母親の教育志向が単に家庭の中で完結するものではなく、「誰を参照するか」という主体的判断を含む社会的相互作用の中で形成されていることを意味する。しかし、こうしたネットワークの影響に加えて、母親が生活する地域社会の教育文化や制度的文脈といった地域要因も無視できない。これまでの研究では、ネットワーク要因と地域要因はおおむね別々に検討されることが多く、両者の相互作用に着目した実証研究は限定的であった。そこで本研究は、母親の教育志向に対して、階層的属性、ネットワーク構造、地域要因がそれぞれどのように影響し、また相互にどのように作用しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. データと変数設計

本研究では、「子どもの生活と学びに関する親子調査」の全国パネルデータを用いる。小学1年生から高校3年生までの子どもとその親を対象にした調査で、2015年と2018年の2時点データを用いてランダム効果モデルによる分析を行った。従属変数は、「できるだけ良い大学に入れるように成績を上げてほしい」という母親の教育志向（4件法スコア）である。主な独立変数は、「誰から子育てや教育についての情報を得ているか」に関する10項目（配偶者、親、友人、ママ友、学習塾の先生など）で、各項目について0/1のダミー変数を作成した。また、地域要因として都道府県の大学進学率や都市規模を用い、情報源と地域の交互作用も検討している。

3. 結果 ※分析の詳細な結果については、当日の発表にて報告する。

分析の結果、とりわけ、「学習塾の先生」を教育情報の情報源とする母親は、「できるだけ良い大学に入れるように成績を上げてほしい」とする志向が有意に高かった（ $\beta = 0.109, p < .001$ ）。また、「自分の親」（祖父母）を情報源とする場合も、教育志向に対して有意な正の影響が見られた（ $\beta = 0.024, p = .042$ ）。

一方で、「職場の知人」や「学校の先生」はいずれも有意な負の効果を持っており、教育志向の強さを抑制する方向に働いていることが示唆された。さらに、「学習塾の先生」と「政令指定都市・東京23区」の交互作用項は有意であり（ $\beta = 0.034, p = .010$ ）、都市部において塾の影響がより強く母親の教育志向に作用している可能性が示された。他の情報源（配偶者、子ども、親戚、友人、ママ友など）については統計的に有意な影響が確認されなかった。

4. 考察

本研究は、母親の教育志向が個人属性に加え、情報源としてのネットワークや居住地域の制度的・文化的文脈とどのように関係しているかを実証的に明らかにした。分析の結果、学習塾の先生のような受験志向の強い情報源は教育志向を高める一方、学校教員や職場の知人など中立的立場の情報源は志向を抑制する傾向が見られた。また、祖父母世代とのつながりが教育志向を強める傾向も確認され、拡大家族の影響を示唆する。さらに、塾講師の影響が都市部で特に強まるという交互作用の発見は、教育志向の形成における地域文脈の重要性を示している。これらの結果は、教育格差の再生産を理解するうえで、階層・ネットワーク・地域といった中間環境を統合的に捉える視点の必要性を示している。

キーワード：教育志向、パーソナルネットワーク、地域差 <参考文献は当日示す>